

# Regularity Theorems for Holonomic Modules

北大理 本多 尚文

(N. Honda)

## 0. Introduction

常微分方程式において、その不確定特異点度と、解の増大度の関係は、いろいろの研究がなされてあり、詳細な結果が知られている。

まず、不確定特異点度の定義を思い出しておこう。

$$P = a_0(z)D^n + a_1(z)D^{n-1} + \dots + a_n(z), \quad a_0(z) \neq 0, \\ a_k(z) \in \mathbb{C}\{z\},$$

に対し、原点における不確定特異点度は、

$$\text{Irr}_{\text{reg}}(P) \stackrel{\text{def}}{=} \max_{1 \leq k \leq n} \left\{ 1, \frac{\text{mult}_{\text{reg}} a_0 - \text{mult}_{\text{reg}} a_k}{n - k} \right\}$$

で、定義される。

この不確定特異点度と、解層を関係付ける結果として、

次の小松 [1] による結果を紹介しておこう。

$\mathcal{D}_{b,0}^{(s)}$  : ( $1 < s < +\infty$ ) 原点における Gevrey (s) クラスの distribution の層の stalk.

$\beta_0$  : hyperfunction の原点における stalk.

$P$  を 寛解析的係数を持つ. 線形常微分方程式とする.

この時.  $P: \beta_0 \rightarrow \beta_0$  において次は同値.

$$(1) \text{Ker } P \subset \mathcal{D}_{b,0}^{(s)} \iff (2) \text{Irr}_{\log}(P) \leq \frac{s}{s-1}$$

これは. 実領域における結果だが, 複素領域における結果. 例之ば, 解層を増大度付きの形式ベキ級数におき換えた時と類似の結果が成立する.

この報告の目標は, 二通りの結果を高次元で証明する事. つまり, ホロノミック系に対して, 類似の比較定理を示す事にある.

さて, まずそのためには, 不確定特異点度を, 高次元でも定義する必要がある. ここでは, 以下の様な定義を採用する.

## 1. 不確定特異点度

まず, 初めにいくつかの必要になる, 層を定義しておく.

$X$  を  $n$  次元複素多様体,  $\Sigma_X$  を  $T^*X$  上の PDO の層,  $\Sigma_X^\infty$  を  $T^*X$  上の無限階 PDO の層とする (二通りの定義は SKK を見よ)

①  $\Sigma_X^{(s)} \subset \Sigma_X^\infty$  : 増大度が Gevrey (s) クラスに属する. 無限階 PDO の層

$P \in \Sigma_x^\infty(U)$  ( $U$  は  $T^*X$  の open set) に対し.

$P \in \Sigma_x^{(s)}(U) \Leftrightarrow \forall K \subset U, \exists C_K > 0$

$$\sup_{(z, \zeta) \in K} |P_z(z, \zeta)| \leq \frac{C_K^i}{z!^s} \quad (z \geq 0)$$

②  $\gamma \in X$  の複素部分  $\gamma$  を採体とする. この時  $\gamma$  に  $\leq$  なる (増大度制限を持つ) holomorphic microfunction の層が. 次の様に定義される.  $\mathcal{O}_\gamma$  は正則関数の層とする.

$$C_{\gamma|X}^{\mathbb{R}, f} := T-\mu_\gamma(\mathcal{O}_\gamma) [\text{Codim}_\mathbb{R} \gamma],$$

$$C_{\gamma|X}^{\mathbb{R}, (s)} := T-\mu_\gamma^{(s)}(\mathcal{O}_\gamma) [\text{Codim}_\mathbb{R} \gamma],$$

$$C_{\gamma|X}^{\mathbb{R}} := \mu_\gamma(\mathcal{O}_\gamma) [\text{Codim}_\mathbb{R} \gamma].$$

$C_{\gamma|X}^{\mathbb{R}, f} \subset C_{\gamma|X}^{\mathbb{R}, (s)} \subset C_{\gamma|X}^{\mathbb{R}}$  は  $T_\gamma^*X$  上の層で.  $\Sigma_x$  (resp.  $\Sigma_x^{(s)}, \Sigma_x^\infty$ ) が作用する. また.

$$C_{\gamma|X}^{\mathbb{R}, (s)} = \Sigma_x^{(s)} \cdot C_{\gamma|X}^{\mathbb{R}, f}$$

が成立する.

③  $V \subset \dot{T}^*X := T^*X \setminus T_x^*X$  は regular or maximally degenerated involutive submanifold とする. 有理数

$\sigma \in (1, \infty)$  に対し.

$$I_V := \{ P \in \Sigma_x; \text{ord}(P) \leq 1 \text{ かつ } \delta_1(P)|_V \equiv 0 \},$$

$$\Sigma_V^{(0)} := \sum_{n \geq 0} \Sigma_X \left( \frac{(1-\sigma)^n}{\sigma} \right) I_V^n$$

を定義する。また  $\Sigma_X(\mathbb{R}) := \{ p \in \Sigma_X ; \text{ord}(p) \leq \mathbb{R} \}$ .

2. いよいよ、不確定特異点度の定義をする。

$\mathcal{M}$  を  $p \in \mathbb{R}^* X$  近傍に定義された holonomic  $\Sigma_X$  module とする。

[定義]

$\mathcal{M}$  が高  $2\sigma$  の weak irregularity を持つとは、

$p$  の近傍の  $\text{Supp}(\mathcal{M})$  が smooth な任意の点  $q \in \mathbb{R}^* X$  に対し、

次の条件を満たす  $V$  と  $\mathcal{M}_0$  が存在する時を言うものとする。

1)  $V$  は <sup>degenerated</sup> maximally involutive submanifold 2.  $\Sigma$  の singular locus かつ  $q$  の近傍 2.  $\text{Supp}(\mathcal{M})$  に一致する。

2)  $q$  の近傍 2.  $\Sigma_V^{(0)}$  module  $\mathcal{M}_0 \subset \mathcal{M}$  が存在し、

$\mathcal{M}_0$  は  $\Sigma(0)$  coherent 2.  $\mathcal{M} = \Sigma_X \mathcal{M}_0$  を満足する。

□

holonomic  $\mathcal{D}_X$  module  $\mathcal{N}$  が高  $2\sigma$  の weak irregularity を持つ

とは、 $\Sigma_X \otimes_{\mathcal{D}_X} \mathcal{N}$  が、上の条件を満たす時を言うものとする。

上の条件は、一見複雑なものが、量子化接触変換 2.  $\text{Supp}(\mathcal{M})$  を、主向きの位置に持つと行くと、非常に simple な条件 2. 成り事が判る。また一変数の時は、Introduction 2. 定義した  $\text{Irr}$  と一致する。

## 2. 主結果

以上の準備の元、主結果を述べよう。

[定理]  $U$  を  $\mathbb{C}^* \text{Conic}$  な  $T^*$  の open set.

$M$  を holonomic  $E_x$  module,  $\sigma \geq 1$  を有理数とする.

この時、以下の条件は同値である.

(1) 確定特異点型の holonomic  $E_x$  module  $M_{\text{reg}}$  が存在し、

$\forall S \in [1, \frac{\sigma}{\sigma-1}]$  に対し、

$$E_x^{(S)} \otimes_{E_x} M \simeq E_x^{(S)} \otimes_{E_x} M_{\text{reg}}$$

が成立する.

(2) 任意の部分複素多様体  $Y$  に対し、次の同型が成立する.

$$\text{RHom}_{E_x}(M, C_{Y|X}^{\mathbb{R}, (S)})|_U \simeq \text{RHom}_{E_x}(M, C_{Y|X}^{\mathbb{R}})|_U,$$

$$S \in [1, \frac{\sigma}{\sigma-1}]$$

(3)  $M$  は、高  $R$  の weak irregularity を  $U$  上持つ.

□

ここでは、証明のかわりに、条件の意味について述べておく。(1)は、任意の holonomic system は、その irregularity に応じた  $(\frac{\sigma}{\sigma-1})$  の増大度を持つ。無限階の PDE を用いて、確定特異点型に変換出来る事を示して置く。

(2)は、introduction で述べた、小松 [1] の結果に対応するものである。ここでは、Gevrey class の ultra distribution を用いる替りに、Gevrey class の holomorphic micro function

を用いて、)

もし、 $X$  がある実解析的多様体  $M$  の複素化で、 $\text{Supp}(M)$  が  $T^*X$  内の実解析的集合の複素化 (Smooth 点で) なるば、

(2) の  $C_{T^*X}^{(R, (s))}$  を  $D_{b, M}^{(s)}$  に置き換えた同様の主張の元で、

定理が成立するか、一般の場合が成立するかどうか判らな  
い。(もちろん、 $\text{Supp}(M)$  の局所的成分のすべてが、 $T^*X$  と  
交わるを仮定して)

主定理の証明は、準備中の論文を見ていただきたい。

- [1] H. Komatsu : On the regularity of the hyperfunction  
Solutions of linear ordinary differential equations  
with real analytic coefficients. J. Fac. Sci. Univ. Tokyo,  
Sec. IA 20, 107-119 (1973)